

東北女子大学の生みの親 しばた  
柴田やす

その日、つまり一九五〇年（昭和二十五）五月十四日は、朝からおだやかな日和であった。賑やかだった弘前公園の観桜会もおわって、庭の木々の葉も日ましに緑を増していた。

いつもより早目に起きたやすは、まず柵棚に向かって静かに手を合わせた。きょうの、東北女子短期大学開学式が、すべて落度なく進行し、無事に終わることを祈ったのである。この日はまた「母の日」にあたっていた。いや、やすは、女子の大学の開学式には、この日こそ最もふさわしいと、わざわざ五月十四日を選んだのである。

軽い朝食のあと、やすは、きのう事務員に清書してもらった「式辞」に、いま一度目を通してみた。

「新緑した滴たる今日の佳き日にあたり、来賓各位多数のご臨席を得まして、ここに本学開学の式典をあげるに至りましたことは、本学園にとりまして誠に光栄であり、感激であります。」

初めの二、三行を小さく声に出してみながら、やすは思わず、何か身の引き締まるのを覚えるのであった。

やすは、着付けの手伝いに来た職員に対し、「すみませんが、おじさんに白足袋を買わせて下さい。」と頼んだ。きょうの晴れの式典には、

下着から白足袋まで、すべて真新しいものを身につけて臨みたいと思ったからである。これがまた、彼女の死出の旅路の装束になるうとは、当人は無論のこと、甲斐甲斐しく、しかも和やかに着付けの手伝いをする人々誰一人として、知る由もなかった。

和服の黒紋付と黒袴に着替えたやすは、上瓦ケ町の柴田学園に出勤した。校門の周囲や校庭は、チリひとつなくきれいに掃き清められ、国旗掲揚台には、青空高く日の丸の旗があざやかにひるがえっていた。

つぎつぎと登校してくる制服の学生達、きょうはどの顔もみな生き生きと喜びに溢れていた。

午前十時、高く鳴りわたった電鈴を合図に、学生及び生徒代表、職員、同窓会、大学振興会員、来賓の順で、約千名が講堂に入場、着席した。静まりかえった広い式場に、「一同起立」のピアノの音が力強く響きわたる。開式の辞、国家斉唱に続き、いよいよ学長の式辞である。

進行係にうながされてゆっくりと登壇する学長の胸には、名誉の藍綬褒章と大輪の白バラがつけられている。黒の紋付と袴の盛装には、その白バラと白足袋が、ひときわまぶしく輝いてみえた。

壇上に立った彼女は、手にした式辞をひろげ、落着いたゆるやかな口調で読み上げていった。

「今日の盛典を迎えまして、私は、今さらながら、二十八年前、浅学せんがくひさい菲才の身をもって、和洋裁縫女学校を創設致したことを思い、当時の柴田後援会のご同情あるご援助を追想し、感慨無量なるものがございます。」

ここまで読んで、やすはひと呼吸おいた。二十八年前のことが、また優しかった母の微笑みが、はっきりと眼前にうかんできたのである。

柴田学園の創始者である「柴田やす」は一八八一年（明治十四）の元旦、父今村儀三郎と母ひさの長女として、当時の青森町の安方町に生まれた。その頃儀三郎は、青森で酒造業を営んでいた。母は、同じ青森町米町の、南了益という医者の娘であった。了益は、娘が元旦という目出たい日に出産したこと、しかも、自分にとっては初孫であるというので、大いに喜び「世は浦安の安方に 生あれて久しく安けくもあれ」という歌を作って「やす」という名を付けてくれた。「久しく、安けく」というのは、母の名「ひさ」と、安方町の「やす」をとり、末永く、丈夫で安らかに育ってほしい、という願いをこめたものであろう。

ところが、この祖父の願いも空しく、やすは幼い頃からまことに不運な子であった。体の弱かった父の儀三郎は、娘（やす）が生まれて僅か九ヶ月後に亡くなり、その為、母ひさは乳呑児のやすを抱えて、実家の南家へ帰ることになる。こうして、父の顔を知らぬやすは、それでも母や祖父母の愛と慈しみを受けながら、すくすくと成長していくのであった。

夫に死なれた母（ひさ）は、やすが七歳の時、東津軽郡荒川村の白鳥策太郎という人と再婚することになり、やすは母に連れられて白鳥家へ移ることになった。この為、こんどは白鳥家の子として、小学校へ入学するのである。

母は、白鳥家でつぎつぎと子を産んだので、これ迄は一人っ子だったやすに、たくさん妹や弟が出来るのだが、それにしても実の妹や弟ではなかったの、何かと気を遣い、小さな胸をいためたことであろう。

一八九四年（明治二十七）、十四歳になったやすは、優秀な成績で新町小学校高等科を卒業した。ところが、卒業と同時に「お前は、これから一人前の娘となるために、裁縫や家事をひと通り覚え、嫁にいく支度をしなければならない」という母のいつついで、こんどは、家事手伝いをかね、伯父の今村勝三郎の家で養育されることになった。おそらく、後妻として嫁いできた母の、白鳥家や弟妹達への遠慮もあったのではなからうか。とも角、こうしてやすは、僅か十四歳で、四度もその生活の場をかえることになるのだった。しかし、こんな逆境や不幸にあっても、彼女は決していじけたりはしなかった。幼い頃に父を失い、生母とは別れて暮さねばならぬという、いわば孤児のような立場だったが、生まれつき利発で賢いやすは、いつも明るい、しかも誠実なその態度で、周囲の人達を感心させたのである。それにしてもこの頃、やすは母が恋しくなつて、よく荒川の母のところへ会いに出かけたという。幼い時から他人の家を転々とした彼女にとって、苦しい時、悲しい時にこそ、母の愛が心の支えとなっていたのだろう。やすはのちに、母についてこう語っている。

「私は生まれてまもなく父を失いましたので、母だけから教え育てられました。幼時の第一印象は、母ほど優しく慈愛にみちたものはないと思つたことでした。しかし私が成長するにつれ、その愛は正しい愛で、決して溺れる愛ではないと知りました。」

やすの父今村儀三郎の生家は弘前である。本町一丁目の「大津屋」（今村九左衛門）である。大津屋といえは、同じ町内にあった金木屋（武田甚左衛門）とともに、藩政時代から続いた豪商で、代々御用商人を勤めた家柄であった。呉服商と醬油店を手広く営んでいたこの大津屋も、幕末の廢藩置県による社会情勢の变革についていけず、商売に失敗して財産を無くし、十一代目今村九左衛門の時に、遂に店を閉じて青森へ移ったのである。やすの父儀三郎は、十一代目九左衛門の三男であった。

一八九七年（明治三十）、二十歳になったやすは、青森市博労町の呉服商柴田勇吉と結婚する。夫を助けながら、やすは毎日店に出て懸命に働いた。遊びずきの夫は、常に外出勝ちで商売にあまり熱心ではなかった。だからやすは夫の分まで懸命に働いた。二人の子もうまれた。この俣でいけば、単に働き者のおかみさんとして一生を終えたかもしれぬ彼女に、運命の転機がおとずれた。やすの義理の妹が、東京の学校へ入学することになり、やすは妹に付いて上京したのである。学校への入学手続きをとる妹達をみて、やすの向学心がむらむらとこみ上げてきた。そして家の商売のこと、夫のこと、将来のことをいろいろと考えたのである。

これからの女性は、女として、母として独立して生計が出来なければならない。そのためには、何か仕事を身につけておくべきではなからうか。幼い頃、苦勞した母のようすを具つづに見てきたやすにとって、これは切実な問題であったに違いない。幸い、二人の子は、いま他家に

預っている。今こそ自分の夢を実現するいい機会ではなからうか。そう思ったやすは、東京府家事教員伝習所への入学を決め、それを許された。やす二十六歳の時であった。それにしても、女学校を卒えたばかりの十七、八才の若い娘達と、一緒に机を並べての勉強である。結婚以来学業から遠ざかっていた主婦としては、伝習所での学習も大変であったろうが、生来負けん気のやすは、歯をくいしばって勉学に専念したのであった。

学業をおえ、教員の資格をとったやすは、東京市の小学校に採用された。彼女が教育の道に足をふみ入れたその第一歩である。

小学校に勤めながら、週二回は洋裁の学校にも通ってその技術を学んだ。やすの計画では、青森に残してきた二人の子を一日も早く引き取り、東京で働きながら育てることであったが、ある時、夫勇吉の妹婿が上京してきて、やすに青森へ帰ってくるようにすすめた。「病気で倒れた勇吉が、これまで苦勞をかけたことを、しきりに詫びている」とのことだった。こうしてやすは、計画を変えて青森へ帰ることにしたのである。

青森の小学校に勤めながらも、やすはなおも勉強を続け、中学校家政科被服教員免許状をとって、青森市公立女子実業補習学校（のちの青森中央高校）に勤めることになる。

一九一三年（大正二）は、小学生だった長女がカリエスを病んで死に、また三女が生まれるなど、やすの身边は多忙だった。乳呑児を抱え

ての教師勤めも大変であった。こんな時、夫勇吉の妹で、弘前にいるきぬが、しきりに弘前へくることをすすめた。かねてからの自分の計画をすすめるためにも、このさい思いきって青森から弘前へ移ろう、やすはそう決心した。一九一四年（大正三）のことである。

青森生まれで青森育ちのやすだったが、弘前は父の生地であり、また親戚や知人も多かった。そこで、教師としての勤め先を頼んだところ、彼女を知る人達は、「学校に勤めるよりは、自分の学校を作ったら」とすすめた。当時の弘前には、県立弘前高等女学校と私立弘前女学校の二つの女子中学校があつたが、家庭人として、主婦としての実学や学習にはまだ不十分であつた。つまり、花嫁として主婦としてすぐ役立つような実学を教える学校がなかつたのである。「あなたがその要望にこたえる事のできる適任者だ」とすすめられたやすは、鍛冶町に家を借りると「和洋裁縫手芸教授」の看板を掲げ、生徒十五人を集めて裁縫教授の私塾をはじめた。やすが三十四歳のときの事である。研究熱心であり、しかも仕事の丁寧なやすの仕事は「柴田式裁縫」と名付けられ、市民の評判になった。また生徒には裁縫の他、生け花、茶の湯、習字なども教授し、一九二〇年（大正九）四月には、定員五十名の私立柴田和洋裁縫女学校を開校するまでになったのである。

開校式の朝、やすは十坪（三十三平方米）ほどのせまい庭を掃き清めた。そして片隅に小さな木の苗をみつけた。若い芽をつけた十センチほどのその若木は、ニワウルシの幼木だった。開校式の朝に発見したということで、特別やすの心を打った。

「お前と私は、きょうから一緒に出発しよう。私もがんばるから、お前も枯れないで大きく伸びておくれ。」

やすは、その幼木へ、人にでもするかのようにこう話しかけるのだった――。

僅か五十名の生徒で発足した柴田和洋裁縫女学校は、写真館を改造した狭い教室であった。しかも晴れの開校式に着る紋付がなく、縞の袴をつけて式辞を読んだのだった。それが昭和二十五年のいまは、東北女子短期大学をはじめ、東北女子専門学校、東北栄養学校、柴田女子高等学校、柴田女子中学校など、五つの学校と約二千名の生徒を擁する総合学園までに発展したのである。

「過去二十八年間は、私にとり、苦闘と共に感謝の歴史でございました。くる年毎に栄えゆく学園を巣立つ多数の卒業生が、或は教壇に、或は家庭に、或は社会に、堅実な働きをなしていることは、私にとってこの上ない大きな喜びでございます。」

学長が読み上げるその一語一語を、在校生は無論のこと、同窓会、父母や来賓に至るまで、深い感慨をもって聞き入っていた。

「私はここに、本学に学ぶ学生諸姉に一言したいと思います。」

ここまでいうと、一瞬言葉が途絶えた。一同が学長の次の言葉を期待していたその時、学長は、まるで花が崩れ散るように、音もなく壇上に倒れたのである。

正面のテーブルから、かき消すかのようにその姿が見えなくなったので、学生も来賓も「何事がおきたのか!」と思わず顔をこわばらせた。



その時壇上では、いち早くかけ上がった今村敏（二女）と斎藤馨両教授が、倒れた学長を抱きかかえ、手早く学長住宅へと運んだ。

「学長が倒れた！ しかも式辞の途中で」

先刻まで場内に満ちていたあの晴れやかさが、一転して不安と憂色にかわった。しかしその動揺もほんの束の間、再び壇上に上った斎藤馨教授は、テーブルの上に開かれた俵になっていた式辞をとり上げると、学長に代わり、落ち着いた態度で、式辞の続きを読み上げた。その時、講堂の時計は丁度十一時を指していた。

式典が終わり、学長は危篤状態ということにして、祝賀会は予定通りに行なわれた。まだ学長の死を知らされていなかった参加者は、学長の病状を気にし、その回復を祈りながらも「柴田学園万歳！ 東北女子短期大学万歳！」を唱和して大学の開学を祝った。やすの枕元に集まった親戚の者たちは、講堂から聞えてくる「万歳」の声を聞きながら、「せめて、あの万歳の声を聞かせたかった」と泣き伏した。そのやすのふところには、式辞のあとで披露するつもりで書かれた二首の歌があった。

大学を 建てししるしにとめどち

励み学びて つくせ世のため

汲む酒を 味はふたびに思ふかな

人の情の かくやおほけき

前の歌は学生に与えるため、後のは後援者へ対して、心こめて詠んだものだった。そしてこの歌が、彼女の辞世となったのである。

翌日の新聞には「柴田やす女史急逝、東北女子大開学式の席上、壇上で式辞朗読中倒る」という大きな見出しで、その劇的な逝去を伝えた。

死因は心臓麻痺、行年七十歳であった。また、二女の今村敏教授は学長の急逝について、

「母は信念を貫いた人です。女子教育に生涯の一切を捧げた母が、栄ある大学の開学式の壇上に倒れたのは、本望だったろうと思います。」  
と述べた。

上瓦ケ町にある東北女子短期大学の校門わきの一隅には、昭和二十九年七月十四日に建てた「大学を建てししるしに……」の歌碑がある。  
柴田学園の創始者柴田やすのこの歌碑は、そのとりにある大きなニワウルシの木とともに、朝夕、元気に登下校する学生達を、いまでも優しく見守っている。

**参考文献** 柴田学園編『柴田やす女史追悼録』一九五二年（昭和二十七）柴田学園

船水 清『柴田やす』「ここに人ありき③」一九七〇年（昭和四十五）陸奥新報社

**出典**…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二二九～二三九頁